

第1章 はじめに

1 研究主題

「自己をコントロールする力が育ち、自己肯定感が実感できる学習の在り方」

2 主題設定の理由

21世紀は、ますます変化の激しい社会であり、一人一人が自己の在り方や生き方を考える上で、先行き不透明な社会であることは確かである。

学校教育においては、その時代を力強く生き抜くために、子どもたちに全ての教育活動を通して「生きる力」の育成を図り、豊かな心をもちたくましく生き抜ける能力を身に付けさせるとともに、学習における基礎・基本の確実な定着を図り、それを基盤に自らが豊かな個性を培うことができる主体的な学習の在り方を身に付けさせねばならない。

平成元年に学習指導要領が告示されてすでに12年が経過した。学校教育においては、その趣旨を踏まえた各校の教育課程の編成・実施が進められるとともに、教職員の教育観の転換が図られ、指導方法の工夫など授業改善が実践され、大きな教育改革の流れの中で、生涯学習の基盤を培うという学校教育の在り方が確立し、子どもたちの主体的な学習の姿が実現されつつある。

一方、それら多くの成果とともに、依然として続く不登校の増加傾向やいじめの潜在化、いわゆる学級崩壊、校内暴力、校種を問わず懸念されるキレる子どもの増加、友人関係の希薄化、学校生活における無気力傾向など多くの教育課題が存在する現状がある。

これらの課題を学習活動の場面を中心にとらえ直すとき、子ども一人一人の中で機能すべき自己をコントロールする力や、はぐくまれるべき自己肯定感が貧弱であることが非常に気にかかる状況にあると考える。

そこで、本研究では、自己をコントロールする力（以下本研究では自己コントロール力とする）を発揮し、自己肯定感を実感しながら、一人一人が主体的に「生きる力」をはぐくむことができる学習の在り方について考察し、具体的に検証することを通して今日的な教育課題の解決方策の一端を提示することとして主題を設定した。

3 研究仮説

「自己コントロール力」は、学習活動における自己のつまずきや葛藤の場面の中で、自らの否定的な欲求を抑えたり、逃避するのではなくその状況を客観的に整理し認識したり、その課題解決に向けて、積極的に忍耐強く努力する能力であり、それらを発揮する場を学習の過程において適切に設定し、一人一人の子どもがその能力を身に付けることは主体的な学習を支える基盤となる。

「自己肯定感」は、自らの学習活動を振り返り、その結果や成果、又自己の努力した学習過程そのものに達成感や充実感を感じたり、他者からの承認や賞賛を得るなどすることを通して実感できるものであり、それらの機会や場を学習の過程で適切に設定することは、次の学習へ向かう積極的な態度や意志の形成につながる。

様々な学習場面において自己コントロール力を発揮させることができることや自己肯定感を実感できることは、一人一人の子どもが主体的に学習活動に取り組もうとする態度や意欲を培うだけでなく、豊かな人間性を身に付ける上からも大切なことであり、生きる力をはぐくむ上で、大きな、重要なキーワードとなると考える。2つのキーワードから学習活動における子どもの状況を把握・分析するとともに、それらが有効に機能する学習活動の在り方を考察し、授業実践を通して具体的に検証することは、授業改善につながるものであるばかりでなく、学校教育における生きる力の育成の一方策を提示することとなる。

4 研究の内容と年次計画

自己コントロール力を発揮し、自己肯定感を実感できる学習活動の在り方や方法について、具体的、実践的に研究を進める。

(1) 内容

子どもの現状など、今日的な教育課題について認識を深め、今日までの教育改革の流れやその成果と課題について再確認するとともに、学習活動を取り巻く課題を明らかにする。

自己コントロール力と自己肯定感が学習場面で働くことの有効性について調査・検証、考察する。

自己コントロール力を発揮させ、自己肯定感を実感させる学習の在り方、方法について考察する。

自己コントロール力と自己肯定感をはぐくむ授業の在り方や方法・留意点について、実践的に検証する。

(2) 年次計画

ア 1年次（平成12年度）

今日的な子どもの現状と課題について、諸答申や国等が実施した調査結果を踏まえ、認識を深めるとともに、学習活動を中心にその解決に向け、どのような視点で、どのような方策をとることが望ましいかについて考え、具体的な授業展開を例示しながら整理する。

また、2年次に各校種を対象に実施する、授業と子どもに係る調査の項目について検討する。

イ 2年次（平成13年度）

各校種ごとに、学習活動にかかわる児童生徒及び教員を対象とする調査を実施する。

調査結果を整理・検討し、本府における状況の把握の上に立ち、課題とその解決策について考察するとともに、各校種から研究協力員を委嘱して、具体的実践を基に授業における自己コントロール力を発揮させ、自己肯定感を実感させることができる授業の在り方について考察する。

ウ 3年次（平成14年度）

2年次の研究成果を踏まえ、仮説に基づく具体的な授業の在り方等を整理し、授業を通して仮説を検証する。そのため各校種ごとに学校としての協力を依頼する。